

特別公開

5月7日(火)まで

「国宝・彦根屏風」

近世初期風俗画の傑作、国宝・彦根屏風を特別公開します。

5月10日(金)~6月10日(月)

「“こと”のこと

— 日本伝統の絃楽器 —

日本において絃楽器は、古くは“こと”と総称されました。倭琴(やまとごと)(和琴(わごん))、箏(そう)のこと、琴(きん)のこと、琵琶(びわ)のことと呼ばれた日本伝統の絃楽器について、それぞれの構造や特徴などを紹介します。



▲和琴 銘 葵 松本重行作

ギャラリートーク

5月11日(土) 11:00~11:30、14:00~14:30

※事前申込:不要 場所:展示室1

観覧料が必要

..... 【5月18日(土)は「国際博物館の日」】 観覧者に記念品を差し上げます (なくなり次第終了)。

常設展示の作品

常設展示「“ほんもの”との出会い」では、譜代大名筆頭・井伊家に伝来した名宝を中心に展示を行っています。

“ほんもの”との出会い

5月8日(水)~7月15日(月・祝)

源氏物語 (附 石山寺蒔絵源氏筆筒) 中院通茂筆

江戸時代前期の公家、中院通茂(1631-1710)が筆写した源氏物語54帖。足かけ3年で完成しました。紫式部が源氏物語を構想したと伝わる石山寺を題材とした蒔絵箱(まきえばこ)が付属し、優雅な調度品となっています。



5月7日(火)~同9日(水)は、一部休室しています。

チケット情報

ひこね市文化プラザ

5月6日(月・振) 14:00 エコーホール

第10回エコーホールピアノメンバー演奏会 ア・ピアチェーレ!

自由 入場無料 (要入場整理券) クラシックの演奏会に定評があるエコーホールで、外国製のフルコンサートピアノを使い、メンバー8人が演奏します。【配布中】

5月24日(金) 10:15 / 13:00 メッセホール

ベビーといっしょにコンサート 2019

出演:高木充江(うた)、山本哲子(うた)、今堀智子(ピアノ)、森有子(ネコ)

自由 【好評発売中】 一般500円、友の会450円 ※大人1人につき未就学児2人まで無料。

8月4日(日) 14:00 グランドホール

キエフ・クラシック・バレエ チャイコフスキー「夢の3大バレエ」

指定 【好評発売中】 一般3,800円、友の会3,500円 ※4歳以上入場可。0~3歳を対象に託児サービスがあります。 バレエの本場・キエフの名バレエ団が届ける、子どもから大人まで楽しめるステージ!

申込・お問い合わせ先 チケットセンター ☎27-5200 (9:00~19:00) インターネットでも購入いただけます。https://bunpla.jp/

5月の休館日 7日(火)、13日(月)、20日(月)、27日(月)

【ひこね市文化プラザ各公演 発売初日の予約の取り扱い】

※電話予約・インターネット予約のみの受付となります。 ※窓口でのチケット引き取り・販売は翌開館日から承ります。

みずほ文化センター

5月18日(土) 14:00 練習室

みずほ寄席 VOL.31

出演:笑福亭飛梅(とびうめ)、笑福亭恭瓶(きょうへい)、代走みつくに、コンチェルト

自由 【発売中】 前売500円 当日600円 ※未就学児は入場いただけません。 ※託児サービスがあります(有料/要予約)。

6月29日(土) 14:00 練習室

《幼児・児童向け人形劇公演》糸あやつり人形劇団みのむし 人形劇バラエティーショー『夢見るコツケちゃん』

マリオネットや手遣い人形、腹話術などいろんな人形が出てくる楽しいバラエティーショー! 小さなお子さんから楽しめるお話です。各地の公演で子どもたちにとっても人気の作品です。

自由 【5月11日(土)9:00~販売開始】 前売500円 当日600円 ※3歳以上有料

申込・お問い合わせ先 みずほ文化センター ☎43-8111 (9:00~17:00)

5月の休館日 2日(休・木)、4日(土・祝)~7日(火)、14日(火)、21日(火)、28日(火)

◎表記の価格は全て税込価格です。
◎みずほ寄席は、託児サービスを行います(子ども1人1,000円)。事前予約が必要です。
◎キエフ・クラシック・バレエは、3歳以下を対象に託児サービスを行います(子ども1人1,000円)。事前予約が必要です。

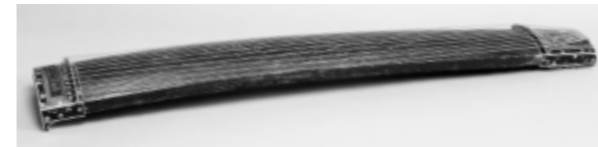
とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ

「こと」は「琴」と書く?それとも「箏」と書く?

奈良時代、中国や朝鮮半島を通じて、さまざまな大陸の音楽と舞が日本に伝わりました。この大陸から伝わった楽舞と日本古来の楽舞とを総合したのが、日本の雅楽です。そして大陸の音楽とともに、これを演奏する楽器も日本にもたらされました。中国から伝来した絃楽器「箏」(写真1)もそのひとつです。箏は、木製の楽器で長さは190cm程度。内部を空洞とした胴の上に13本の絃を張り、絃の下に山型の柱を立てて調律し、右手の指にはめた爪で演奏します。

下に柱は立てず、左手で絃を押さえ、右手の指で演奏します。箏と同じく奈良時代に中国からもたらされ、貴族の間で主に独奏楽器として用いられましたが、次第に廃れ、鎌倉時代にはほとんど行われなくなりました。箏が日本で再び演奏されるようになるのは、江戸時代になってからです。では、いつから、なぜ、箏を「こと」と呼ぶようになったのでしょうか。平安時代、「こと」は箏と琴を含む絃楽器の総称でした。「源氏物語」や「枕草子」には、「和琴のこと」「箏のこと」「琴のこと」と「琵琶のこと」と記されます。和琴は弥生時代以来の日本の「こと」の系譜を引く絃楽器、琵琶は西アジアに起源を持つ、茄子型の胴と屈曲した頸を持つ絃楽器の総称でした。「源氏物語」や「枕草子」には、「和琴のこと」「箏のこと」「琴のこと」と「琵琶のこと」と記されます。和琴は弥生時代以来の日本の「こと」の系譜を引く絃楽器、琵琶は西アジアに起源を持つ、茄子型の胴と屈曲した頸を持つ絃楽器の総称でした。



▲写真1: 箏 銘 稚山 (あきやま)



▲写真2: 七絃琴

このように絃楽器の総称だった「こと」が、特に箏を指すようになったのは、室町時代末期、北九州地方に箏を単独で演奏する「筑紫箏」が誕生したことが契機と考えられています。筑紫箏は絃楽器の内、箏のみを使用するため、他の絃楽器と区別してわざわざ「箏のこと」と呼ぶ必要はなくなりませんでした。そのため、「こと」といえば箏を指し、箏を「こと」と呼ぶようになったと考えられるのです。さらに江戸時代になると、筑紫箏から、山田流や生田流をはじめとする箏曲の流派が派生し、人々の間に広く流布します。これらの流派も箏を「こと」と呼んだためにこの呼び方が定着

「箏」の字を「こと」と読むようになりませんでした。そして現代には、「箏」の字が常用漢字ではないため、「箏」にかえて「琴」の字を当てるのが広く行われました。そのため、今のよう「こと」を「琴」と記すのが一般的になり、結果、「琴」という漢字が2つの異なる楽器、箏と琴(七絃琴)を指すという、現在の状態となったのです。では、「こと」は「箏」と書くのか、「琴」と書くのか。答えは、「こと」は本来「箏」と書くけれども、一般には常用漢字である「琴」が用いられているようになります。この「こと」の漢字の表記に関する疑問には、日本伝統の絃楽器「箏」の歴史が深く関わっているのです。(彦根城博物館学芸員 茨木恵美)